

岐阜市立岐阜小学校コミュニティ・スクールの組織と実践 —地域と学校の連携・協働による「ふるさと大好き」の取組—

青山朋宏¹⁾・益川浩一²⁾

¹⁾ 岐阜市立岐阜小学校学校運営協議会会長（〒500-8038 岐阜県岐阜市大工町1番地）

²⁾ 岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸1番1）

1. はじめに

岐阜小学校は、岐阜市の中心市街地にあり、コミュニティ・スクール制度を活用し「地域を創造する学校」を目指している¹⁾。本校は、共に130年以上の歴史のある金華小学校と京町小学校が児童減少のために統合され、平成20年度に誕生した学校である。現在の生徒数は294名である。統合時は408名であったが、年々減少傾向にある。校区は、城下町としての歴史と文化を持つ「歴史のまち・金華」と、官公庁など市民生活を支える施設が集中する「司のまち・京町」の2地区で構成されている。令和4年度の岐阜市の調査によると、2地区の合計世帯数は3978世帯、人口8059人である。総人口の65歳以上の人口割合を示す高齢化率は、京町地区45.13%、金華地区39.21%である。岐阜市平均29.12%と比較して、両地区とも高齢化率の高い地域である。京町地区は、岐阜市で一番高齢化率が高い。校区には、岐阜城、金華山、長良川、岐阜公園、川原町などの古い町並み、市役所、市立図書館（みんなの森メディアコスモス）、歴史博物館、裁判所、消防本部、NHKなど、各地から遠足や社会見学で来られるような施設が多くあり、子供たちは恵まれた環境にある。開校と同時に岐阜市初のコミュニティ・スクールに指定され、現在に至っている。

2. 岐阜小学校コミュニティ・スクールの施設環境

校舎は、設計の段階から地域住民の使用を意識し、メディアセンター、図書館、コミュニティ・ルーム、特別教室は地域の人にも身近で開かれた場所になるよう全て1階に配置し、クラスルームは安全面を考慮し2階に配置されている。このクラスルームの配置は、地域が学校を利用する際の児童の個人情報保護にも有効である。広い廊下や階段、大きな窓、仕切りの取り外せるクラスルームなど開放感にあふれた造りとなっている。一階中央に玄関があり、ガラス張りの職員室の横を通り校舎に入るのだが、開放感のある造りにより子供たちと地域住民が顔を合わせることになる。校舎内には地域住民や保護者が自由に使用できるコミュニティ・ルームと呼ばれる部屋があり、これが岐阜小校区、すなわち岐阜小コミュニティの拠点となっている。このコミュニティ・ルームは校舎外からの入口があり直接部屋に入ることができる。校舎内側から鍵を掛ければ校舎内には入ることはできない。イベント前の準備で夜間使用する場合などには前もって入口の鍵を借りておくことで、教職員が居なくても使用することが可能である。地域住民の使用を前提とした校舎の造りは、岐阜小コミュニティの発展に大きく寄与している。

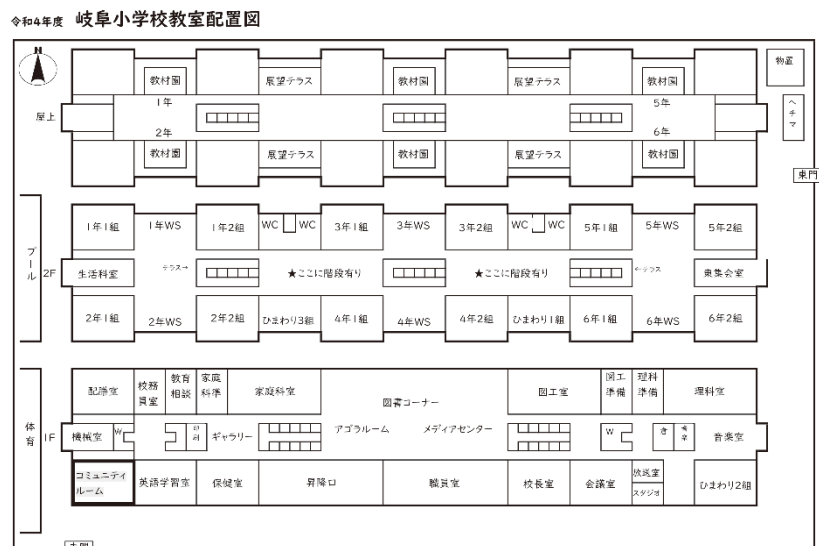


図 1 岐阜小学校教室配置図

3. 「ふるさと大好き」

岐阜小学校は、開校と同時に岐阜市初のコミュニティ・スクールの指定を受けている。指定に

より学校運営協議会ができたことで、金華・京町の二つの地区の代表が顔を合わせて話し合いを持つ場ができ、両地区の相互理解が進んだ。両校ともに長い伝統があり対立することもあったが、度重なる議論を経てそれを乗り越えてきた。

両地区ともに、まちづくり協議会や各種団体による地域活性化を行う地域として、「ふるさとに誇りと愛着を持ち、地域社会の一員として、将来的に地域を担う子供たちを育成したい」という願いがある。

このことをふまえ、岐阜小学校では、コミュニティ・スクールを進める上で「ふるさと学習」を基盤とし、子供たちが自信と誇りを持ち、地域の一員として主体的にかかわる姿を目指している。合言葉として「ふるさと大好き」を学校、家庭、地域、また、大人にも子供にも分かりやすい言葉として掲げた。「ふるさと大好き」を合言葉にしたことで、このあと紹介する岐阜小コミュニティ・スクール組織の各専門部が行う具体的な活動の方向がひとつに定まった。また、学校、家庭、地域、子供たちが同じ目標に向かって取り組むことができ、コミュニティ・スクールのねらいや役割を理解する上でも大いに役立ち、連携がよりスムーズになったという効果があった。

「ふるさと大好き」の合言葉により、学校、家庭、地域、子供たちが目標を共有し、一体感を感じながら活動ができるようになったのである。



図 2 合言葉

4. 岐阜小学校コミュニティ・スクールの組織

岐阜小学校コミュニティ・スクールの組織を、具体的に紹介する。この組織は、学校、家庭、地域の三者が力を合わせ、「岐阜小学校区全体で子供たちを育てて行くこと」を目的としている。

中心に「学校運営協議会」を置き、専門部として「学び部」「安全・安心部」「地域行事部」を設置している。通常このような場合、学校運営協議会と地域学校協働本部が設置されるが、岐阜小学校では地域学校協働本部は設置されていない。「学び部」「安全・安心部」「地域行事部」の専門部がそれにあたる。

学校運営協議会と各専門部は、地域教育推進コーディネーターがつないでいる。地域教育推進コーディネーターは、地域に精通していることが求められるため、自治会連合会の推薦を受けた自治会連合会役員が選出されている。相互の会議内容を伝える役割をしており、専門部には学校運営協議会の会議内容を伝え、学校運営協議会には専門部での会議内容を伝えている。これにより双方の考えが伝わり活動を円滑にしている。また、学校運営協議会や専門部からの地域への要請を自治会連合会に伝え、活動を円滑にする役割を担っている。

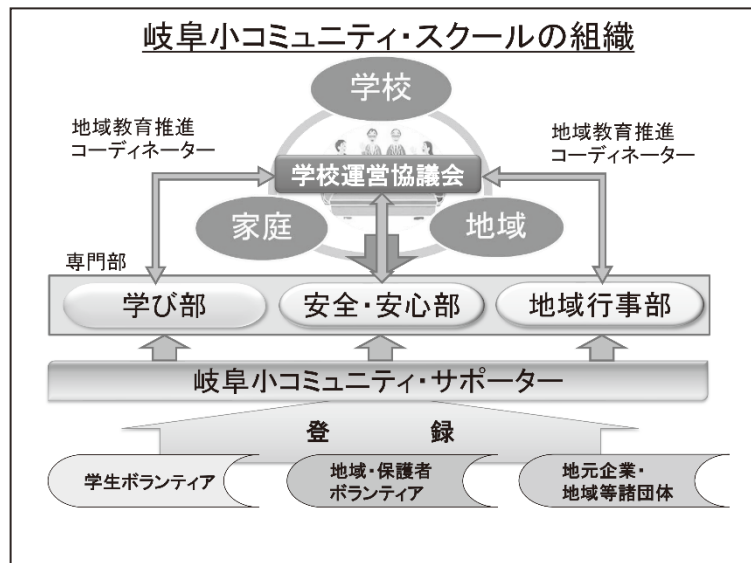


図 3 岐阜小コミュニティ・スクールの組織

各専門部の部長は学校運営協議会には参加していない。参加しないことでその独自性を担保している。学校運営協議会に参加することで活動内容が決められた場合、専門部が学校運営協議会の下部組織であると印象付けられる可能性がある。これを避けるためである。組織図では専門部は学校運営協議会の下部に位置するが、実際には専門部で話し合われたことを学校運営協議会で承認するといった下から上に押し上げるボトムアップのイメージである。コミュニティ・スクール活動は、実際に活動する専門部員一人ひとりが当事者として主体的に活動内容を提案しながら進めていくことが重要であり、そこに義務感や負担感があってはならない。

専門部の独自性を重要視することで、「独走」がおこり活動が間違った方向に進むのではないかと心配される方もあると考えられる。そこで重要になるのが前述した「ふるさと大好き」という

合言葉である。活動がこの合言葉に位置づけられるかを常に意識することにより、各専門部が行う具体的な活動の方向が定まることになる。それに加え、地域教育推進コーディネーターから学校運営協議会の方針が伝えられることにより、学校運営協議会と専門部が同じ目的をもって活動ができる。まさに「目的」の共有化が図られている。

開校当初は、「岐阜小コミュニティ・サポーター募集」のリーフレットを作成し、岐阜小コミュニティ・スクール全体でボランティア募集を行っていた。現在はボランティア人数が安定したこともあり、募集は各専門部で行っている。活動の際には、登録をしていないボランティアが参加することも多く、実際の人数は把握できていない。後述する「地域行事部」の「ふるさとふれあいフェスタ」では、地域の34団体の協力を得ている。また、「学習支援ボランティア」には地域の企業や寺社などの協力を得ているが、教員間の引継ぎ等もあり、学び部を通さず教員が直接依頼を行うことが多くなった。

4-1. 学校運営協議会

それでは、ここからは「学校運営協議会」と「各専門部」の活動内容を順に紹介する。

まず、組織の中心となるのは学校運営協議会である。構成員は、地域代表（自治会関係者）、保護者、保護者OB、岐阜小学校教員、岐阜中央中学校教員、大学関係者、の計26名である。

発足時の会長は岐阜経済大学教授であった。これは金華地区、京町地区のどちらか一方から会長を選ぶのは難しいと両地区に配慮したものである。当初は会長を除く全ての委員が充て職であったが、現在は充て職ではない委員もいる。それが保護者OB、大学関係者（岐阜大学、岐阜聖徳学園大学、北海道教育大学）である。学校、地域、保護者のいずれにも分類されない立場での参加は、会議を円滑にする効果がある。学校、地域、保護者と会議の中で立場がはっきり分かれることで対立構造が生まれやすくなる。保護者OB、大学関係者はその緩衝材になる。学校運営協議会の構成員を選ぶ際には、なるべく幅広い立場の人材を確保するのが望ましいと考えられる。

学校運営協議会では、「学校運営の基本方針の承認」「教育課程の編成等についての協議」「各専門部の活動の承認」「学校に関する状況の点検と評価」等を行う。現在は年7回の会議が行われている。通常、会議は、会長挨拶、学校長挨拶、「学び部」「安全・安心部」「地域行事部」からの報告、意見交換、諸連絡といった内容である。それぞれの立場から活発な意見が交わされ、熱のこもった議論になることも多い。地域団体の代表者が構成員にいたため、そこで話された内容は地域に伝わりやすい仕組みになっている。また、年1回、授業参観、給食試食会を行い、学校評価をしている。

毎年、第1回学校運営協議会では、学校長より「岐阜小学校の学校運営の基本方針」が発表され、学校運営協議会でそれを承認し、共有する。令和4年度は「一律の宿題」から「自主的な家庭学習」への転換が発表された。子供たちの自ら進んで学ぶ力を育むことにより、一人ひとりの可能性を広げるためである。ここでも保護者OBや大学関係者が緩衝材の役割を果たし、対立することなく議論が深まった。岐阜小学校の「一律の宿題」廃止の件は、新聞、テレビ、ネットで報道され大きな話題となった。後日、他校の学校長や他市の教育長から同様の試みをしていることをうかがう機会があったが、岐阜小学校が異なるのは、それを地域や保護者に対して発表し本音で議論を交わしたことにある。これまでにコミュニティ・スクールとして培われてきた教職員、保護者、地域住民の信頼関係があったからこそできたことである。

発足時		現在	
地域代表 自治会連合会会長 民生委員 等	10 金華 5 京町 5	地域代表 自治会連合会会長 民生委員 等	10 金華 5 京町 5
保護者 PTA代表	6 金華 3 京町 3	保護者 PTA代表	4
小学校教員 校長・教頭	2	保護者OB 元PTA役員	4
中学校教員 教頭	1	小学校教員 校長・教頭・教務・生徒指導	4
学園経験者(会長) 岐阜経済大学	1	中学校教員 教頭	1
	20名	大学関係者 岐阜大学・岐阜聖徳学園大学 北海道教育大学	3
			26名

図4 岐阜小学校学校運営協議会構成員

4-2. 学び部

地域学校協働本部にあたるのが、専門部である。専門部には「学び部」「安全・安心部」「地域行事部」の3部が設置されている。

学び部は、ふるさと学習を推進していくために「学習支援ボランティアの依頼とその人材の発掘」「読み聞かせ」「サマースクール」「放課後スクール」「土曜日等の教育活動の支援」等の活動を行っている。また、地域住民の積極的な参画を推進し、情報発信等を行っている。

構成員は、自治会関係者6名、保護者OB4名、保護者3名、教職員1名である。

次に、学び部の主な活動を紹介する。

学習支援ボランティア

岐阜小学校では学習支援ボランティアをコミュニティ・ティーチャーと呼び、「ふるさと学習」を推進してきた。様々な職種や年代の地域住民、約60名が登録をしている。コミュニティ・ティーチャーの参加は、国語・社会・図工・家庭・英語・総合的な学習の時間など多様な教科等にわたる。例えば、戦争の実体験を子供たちに伝えたり、外国生活で経験した文化の違いを伝えたりと、通常の学校教育で実現が難しい授業の支援を行う。学び部では、それらのコミュニティ・ティーチャーの依頼を行うとともに、常に人材発掘にも努めている。



図5 学習支援ボランティアの様子



図6 読み聞かせの様子

読み聞かせ

読み聞かせは、月1回、朝活動の時間に全学年、全クラスで行われる。時間は学校が確保し、読み手の依頼は学び部、本の決定は読み手本人が行っている。現在、地域住民や保護者の26名がボランティア登録をしている。新型コロナウイルス感染症拡大時には、録画による放送や放送室からのライブ配信を行うこともあった。また、地域住民や保護者向けに「読み聞かせ参観」や「読み聞かせ体験」を行い、常に人員確保にも努めている。

ふるさとスクール

ふるさとスクールでは放課後の時間を利用し、学習や遊びの場を年3回程度提供している。過去には、「木で遊ぼう」「英語で遊ぼう」「茶の湯体験」「クリスマスカード作り」「シャボン玉遊び」「くつとばし」等が行われている。年度初めに計画を立てるのではなく、その時に応じ子供たちが楽しめることができそうなことを行うことが特徴である。それにより義務感、負担感をなくし、大人も楽しく活動を行うことができている。



図7 ふるさとスクールの様子

サマースクール

毎年、夏休み期間に行われる「サマースクール」では、学校で学んだことをさらに発展させることを主な目的とした体験型授業を行う。令和4年度は新型コロナウイルス感染症拡大対策を考慮しながら17講座が企画され、15講座が開催された。2講座は新型コロナウイルス関連の講師都合で中止されている。15講座のうち3講座は金華公民館との共催である。例年、「そば打ち」「鮎菓子作り」「クッキング」が行われているが、新型コロナウイルス感染症拡大を考慮し飲食をともなう体験は行われていない。開催期間は7/21から8/4迄である。これからの時代を生きぬく子供たちに求められる主体性、多様性、協働性、創造力、判断力、思考力、表現力といった非認知能力を高めるには、できるだけ多くの体験や経験、人とのふれあいが重要であると考え、多岐におよんだ講座が企画される。また、これらは「ふるさと大好き」の合言葉に位置付くよう実施され、15講座中11講座は校区の地域住民や団体が講師を担当している。計画に際しては、「学校だけではできないことを行うこと」、教職員の働き方改革に配慮し「教職員には頼らないこと」を念頭に置いている。企画、運営は全講座を学び部員である地域住民が行っている。

ここからはサマースクールの具体的内容を、開催日時順に紹介する。参加人数に記載されている教職員数は、ボランティアではなく、体験参加者の人数である。各講座のボランティア人数は登録制ではないため正確には把握できていないが、地域住民、保護者、教職員、中学生、高校生、大学生等、各講座 10 名から 15 名程度である。担当者は決まっているが、それ以外はその講座時に時間をとることができる人が自主的に集まってくる。

infinity		サマースクール2022参加者募集			令和4年6月開催	
みんな集まれ！サマースクールに参加して、講師の先生から学んじゃおう！						
講座番号	日時	講座名	対象学年	定員	講座内容	会場 参加費 講師名
1	7/21(木) 8:30~9:10	Englishで遊ぼう	1~6	20人	英語を使ってゲームをします	音楽室 無料 地域住民
2	7/21(木) 10:00~12:00	雪花しぼりの手ぬぐいを作ろう	4~6	20人	日本の伝統 雪花しぼりを体験します	図工室 500円 地域住民
3	7/22(金) 9:00~10:00	カンボジアから平和を学ぶ	9~6	30人	実際のカンボジアの映像や物を通して平和について考えます	音楽室 無料 岐阜小教員
4	7/22(金) 11:00~11:30	氷鉄砲を作ろう	4~6	20人	竹を使って真ながらの氷鉄砲を作って遊びます	図工室 210円 地域住民
5	7/25(月) 10:00~11:00	ブロックリースプラウト	1~3	20人	種を植えて自分で育ててみましょう お料理の仕方も教えてもらいます	家庭科室 無料 地域住民
6	7/25(月) 10:00~11:00	コットンボール	3~6	15人	涼しげなコットンボールを作りましょう	図工室 無料 地域住民
7	7/26(火) 9:00~10:00	折り紙で遊ぼう	1~2	20人	折り紙で魚を折って魚釣りを楽しみます	理科室 100円 地域住民
8	7/26(火) 9:00~10:00	紙で遊ぼう	3~4	20人	立体折り紙を作ります	図工室 100円 地域住民
9	7/27(水) 9:00~10:00	落書きしよう	1~6	30人	自由に落書きします	体育館 無料 地域住民
10	7/28(木) 9:00~11:00	ロケット	4~6	20人	ペットボトルでロケットを作り 出来上がったロケットを飛ばして遊びます	図工室 運動場 100円 外部講師
11	7/29(金) 9:00~10:00	紙コップで作る	1~3	20人	動くおもちゃを作ります	理科室 100円 地域住民
12	7/29(金) 9:00~10:00	木で遊ぼう	1~3	20人	木片で動物を作ります	図工室 100円 地域住民
13	8/1(月) ① 8:30~9:30 ② 9:45~10:45	命を守る着衣泳	5~6	①20人 ②20人	水の事故から身を守るため「命を守る着衣泳」を体験します	プール 無料 外部講師
14 共通講座	7/21(木) 7/22(金) 8/4(木) 14:00~15:00	【公民館講座】 子どもロボットプログラミング (2回コース)	5	9人	パソコンの英数字を使ったプログラミングでロボット(車)を動かします	音楽 公民館 無料 外部講師

※講座番号14の【公民館講座】は岐阜公民館主催の講座となりますので、参加者決定後、岐阜公民館から詳細の連絡を入れてさせていただきます。

図 8 サマースクール 2022 参加者募集チラシ

English で遊ぼう

対象：1~6 年生 参加人数：児童 37 名、教職員 1 名
講師：卒業生の父親（オーストラリア人）、卒業生 2 名（高校生、大学生）

オーストラリア人講師による体を使った英語遊びの講座。当日は新型コロナウイルス感染症拡大に対応して、開催場所が音楽室から体育館に変更された。この講師は、毎年、講座を開催しており安定感がある。子供たちからは、「先生が面白かった」「英語は苦手だと思っていたけど、楽しかった」といった感想がきかれた。



図 9 English で遊ぼう



図 10 雪花しぼりの手ぬぐいを作ろう

雪花しぼりの手ぬぐいをつくろう

対象：4~6 年生 参加人数：児童 21 名、教職員 5 名
講師：地域住民（呉服店）

地域の呉服店による雪花絞り手ぬぐいを染める体験講座。1 m の白生地を、畳んで染めて手ぬぐいを完成させる。学び部員だけではなく、岐阜小学校を卒業した中学生、高校生、大学生がボランティアに加わっている。また、児童だけでなく、教職員 5 名が受講者として参加していることも注目すべき点である。

「カンボジアから平和を学ぶ」

対象：3～6年生 参加人数：児童22名、教職員1名
講師：岐阜小学校教諭

岐阜小学校教諭が自身のカンボジアでの地雷撤去体験を語る講座。参加した児童、保護者、地域住民、教員、皆が「戦争と平和」について考える貴重な時間となった。この講座が唯一の教職員によるものであるが、学校に依頼したのではなく教諭に個人的に依頼したものである。今後、地域住民向け講座として開催しても良いのではないかと感じさせる講座であった。



図 11 カンボジアから平和を学ぶ



図 12 水鉄砲を作ろう

水鉄砲を作ろう

対象：4～6年生 参加人数：児童24名、教職員2名（息子さんと共に参加）

講師：地域住民、岐阜市少年自然の家職員

竹を材料とした水鉄砲を作る体験講座。仲間と協力して手作り水鉄砲を作った。完成後は運動場で水鉄砲体験。大人も子供もずぶ濡れになって遊んだ。道具の使用は危険を伴うが、多くのボランティアが参加しており、ノコギリやキリの使用の際には必ず大人が見届けるようにしている。子供たちが高齢者の方に水鉄砲で水をかける場面では、ハラハラしつつも微笑ましい様子が見られた。のちにその高齢者の方からは、「楽しかった。来年もぜひ参加したい。」と感想があった。

ブロッコリースプラウト

対象：1～3年生 参加人数：児童22名、教職員2名
講師：地域住民（京町地区食生活改善推進員4名）

エプロンシアターによる食育の後に、ブロッコリーの種を植えて自分で育てる体験講座。例年、調理体験を行っていたが、新型コロナウイルス感染症対策で飲食を伴う講座は中止となり、この講座を行った。初めてのエプロンシアターに悪戦苦闘する大人をよそに、子供たちは楽しく食を学ぶことができた。



図 13 ブロッコリースプラウト



図 14 コットンボール

コットンボール

対象：3～6年生 参加人数：児童15名
講師：地域住民（服飾専門学校）

風船に糸を巻き、糊で固め、乾いてから風船を割るコットンボールを作る体験講座。糸の色の選択や飾りつけで一人ひとり個性のある作品が出来上がっていた。講師の服飾専門学校は、毎年サマースクールで内容の違った体験講座を行っている。地域と子供たちをつなぐという意味でも貴重な講座である。

折り紙で遊ぼう

対象：1～2年生 参加人数：児童24名、教職員4名
講師：地域住民（学び部員）

折り紙で魚を折りクリップを付け、磁石を付けた釣り竿で釣るという体験講座。折り紙体験後は、あらかじめ用意されたいろいろな種類の魚を仲間と競い合いながら釣り上げた。釣りの場面では、糸が絡まり思うように釣れない子供に釣った魚を分けている子供たちがいた。

思いやりや優しさを育む良い学びになった。この講座の講師は、発足当初から毎年違った講座を行っている。次年度の開催が楽しみな講座である。



図 15 折り紙で遊ぼう



図 16 紙で遊ぼう

紙で遊ぼう

対象：3～4年生 参加人数：児童 21名
講師：地域住民（学び部員）

立体折り紙を作る体験講座。何種類もの立体折り紙の製作を楽しんだ。複雑な折り方にボランティアの大人も悪戦苦闘し、子供に教えてもらう場面もあり楽しい講座であった。

落書きしよう

対象：1～6年生 参加人数：児童 88名、教職員 1名
講師：地域住民（学び部員）

体育館半面をブルーシートで覆い、その上で大きな紙に絵の具やマジック、身体全体で自由に落書きをする体験講座。用紙が落書きで埋まると次の紙に何回も交換。最初は遠慮をしていた子供たちも徐々に大胆になり、手形や足形など全身を使いながら落書きをした。子供も大人も一緒になって服や身体に絵の具を付けながらの体験は、学校だけではできない講座である。



図 17 落書きしよう



図 18 ロケット

ロケット

対象：4～6年生 参加人数：児童 29名、教職員 1名
講師：外部講師（航空宇宙博物館）

専門家によるペットボトルロケットをつくる体験講座。各自がペットボトルロケットを作り運動場で飛ばした。勢いよく発射されるロケットに歓声があがった。ひとつひとつの工程を講師の説明を聞きながら丁寧に進める作業は、自由度の高い他の講座と違い精密さが必要とされる。そこにこの講座の良さがある。自作のロケットを飛ばした後は、水の量と飛行距離の関係を比較実験で学んだ。最後は特大ロケットを飛ばし、大歓声の中終了した。

紙コップで作る

対象：1～3年生 参加人数：児童 19名、教職員 2名
講師：地域住民（学び部員）

紙コップを使って蜂の羽ばたく様子を再現した、動くおもちゃ作り体験講座。身近なものを使っての体験は、家庭での再現が行いやすい。児童が先生になり保護者に講座を開いてくれるのではないかと期待している。



図 19 紙コップで作る



図 20 木で遊ぼう

木で遊ぼう

対象：1～3年生 参加人数：児童 18名、教職員 2名
講師：金華山サポーターズ

木の板、枝、木の実など金華山で採取した材料と接着剤などを使い、好きなものを自由にする体験講座。見本の提示なしで作る自由な造形は、児童の創造力など様々な能力を育む。思いもよらない発想の数々に子供たちの可能性を感じることができた。

子どもロボットプログラミング

対象：5～6年生 参加人数：児童 9名
講師：外部講師（プログラミング塾講師）

パソコンの英数字を使ったプログラミングでロボット（車）を動かす体験講座。この講座は公民館との共催のため、募集は学び部が行い、内容に関しては公民館にお任せしている。



図 21 子どもロボットプログラミング

サマースクールでは、多くの体験や経験、人とのふれあいの場を提供し、子供たちの主体性、多様性、協働性、創造力、判断力、思考力、表現力といった非認知能力を高めたいという思いがある。そのため、できるだけ多くの講座を行うことを優先し、PDCA サイクルといわれるもののD（実行）を重要視し、P（計画）、C（評価）、A（改善）にはあまり時間をかけていない。講座を実行しながら、その場で気付いた人が改善していくイメージである。これまで培ってきた経験がそれを可能にしている。計画や評価に時間をかけ講座数が減ってしまつては、本末転倒である。ただし安全面に関しては徹底的に議論して万全を期している。

また、岐阜小コミュニティでは、学校を「地域コミュニティの核としてかかわる人すべてが成長する場所」と考えている。子供だけでなく大人も成長する場なのである。失敗から学ぶことは多い。大人の失敗を見た子供もそこから何かを学ぶ。加えて、もし失敗をしても周りの多くの人たちがカバーしてくれるという安心感、信頼感がそこにある。だからこそ失敗を恐れず本来の目的に向かって、多くの講座を実施することができるのである。

4-3. 安全・安心部

次に、「安全・安心部」を紹介する。安全・安心部では「下校ボランティア」等、登下校および緊急災害時における児童の安全・安心に関する活動の推進と情報発信等を行っている。

構成員は、自治会関係者 11 名、保護者 3 名、教職員 1 名である。

次に、安全・安心部の主な活動を紹介する。

下校ボランティア

下校ボランティアでは、1年生を対象に地域住民の協力を得て、「にっこり見守り隊」を組織している。地域住民ボランティアに1年生の保護者ボランティアが加わる。以前は1年を通して下校引率を行っていたが、現在は子供の成長を促すという観点から、7月までは下校引率、9月からは危険箇所のポイント立ちを行っている。安全面はもちろんであるが、様々な年代の人とかかわることは子供たちの多様性を育むことにつながる。



図 22 下校ボランティアの様子

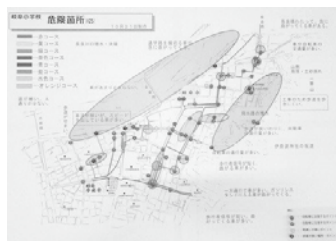


図 23 危険箇所マップ

「道路交通・危険箇所マップ」の作成

通学路を実際に歩いて危険箇所を確認した「道路交通・危険箇所マップ」を完成させた。それをもとに県と市の職員、警察官の立会のもと危険箇所の確認をし、改善を要望した。この「道路交通・危険箇所マップ」は、子供たちも一緒になって作成している。また、学校、行政では解決できない私有地での危険箇所などは、顔見知りの地域住民のほうが解決に導きやすい。

避難訓練、安全教室の助言

安全・安心部には消防団、水防団、交通安全協会等のメンバーが所属している。「避難訓練」「自転車教室」「トラックの内輪差を知る安全教室」等が行われる際の専門的な立場での助言はたいへん参考になる。例えば、「地震の際に体育館に集合するより新しく耐震性の高い校舎の方が良いのではないか」といった助言もあった。



図 24 自転車教室の様子

4-4. 地域行事部

次に「地域行事部」を紹介する。地域行事部は、児童の参加する地域行事などの企画・調整と、情報発信等の活動を行っている。毎年秋に行われる「ふるさとふれあいフェスタ」を担当する。

構成員は、自治会関係者 10 名、保護者 3 名、教職員 1 名である。

次に、地域行事部の主な活動を紹介する。

ふるさとふれあいフェスタ

毎年、秋に行われる岐阜小コミュニティ・スクール最大のイベントが、「ふるさとふれあいフェスタ」である。住んでいる地域の素晴らしさを伝え、大人と子供、地域に住む大人同士の信頼関係を築くことを目的としている。この「ふるさとふれあいフェスタ」では、200名を超すボランティアと一緒に企画・設営を行っている。開催にあたっては34の地域団体の協力を得ている。

令和4年度は「復活だあ〜！みんなで歩こう ぎふの古今♪」をテーマに、3年ぶりの開催となった。1年生から6年生の縦割りグループに中学生や地域住民が加わったチームで、問題を解きながら地域をめぐるウォークラリーである。移動に際しては「安全・安心部」が交差点で交通指導をするなど、安全にも注意を払っている。令和4年度は、地域のお店、市庁舎、みんなの森メディアコスモス、美江寺公園がポイントとなった。出題ポイントでは地域の歴史や文化を知る



図 26 ふるさとふれあいフェスタ

問題や新庁舎の施設を知る問題が用意され、子供たちは解きながら地域を知ることになる。令和4年度は、保護者の協力により出題にQRコードが使われ、タブレットを使って回答をするという初めての試みがなされた。様々な年代の人たちが所属するコミュニティ・スクールの良さが発揮された。令和4年度のウォーク参加者は447名、ポイントスタッフは166名である。また、小学生として参加した子供たちが、卒業後には中学生ボランティアとして参加している。中学生ボランティアは事前の問題作り、ポスター作りのほか、当日には65名が参加している。

子供たちと、チーム内やポイントスタッフの中学生や大人との交流も自然な形で行われる。また、大人同士の交流もあり、参加者全員の「ふるさと大好き」を深めるイベントである。



図 25 ふるさとふれあいフェスタ

5. コミュニティ・スクールとしての歩み

5-1. コミュニティ・スクール指定

ここまで現在の活動内容を紹介してきたが、初めからこのような活動ができていたわけではない。前述のように、岐阜小学校は児童減少のために2小学校が統合されることとなり、平成20年度に誕生した。開校当初はコミュニティ・スクールがどのようなものか具体的なイメージを持たず、方向性の定まらないまま学校主導で活動が進められていた。地域住民は学校を支援する制度だという意識が強く、学校も地域資源や地域人材を教育に活用するという意識が強かった。

5-2. 「ふるさと大好き」による意識変化

意識の変化をもたらしたのは、開校から5年目にふるさと学習を基盤とし合言葉に「ふるさと大好き」が掲げられたことにあった。この「ふるさと大好き」という合言葉は、児童会スローガン、地域広報紙、ふるさと大好きカレンダー、PTA冊子など様々な場面で意識的に使用された。この合言葉により、学校、家庭、地域、子供たちが一体感を感じながら活動ができるようになった。「ふるさと大好き」の合言葉により、地域住民や保護者が学校に協力するという立場ではなく、子供たちを中心にして主体的な立場でのかわりを始めたのである。コミュニティ・スクールは、今ある教職員

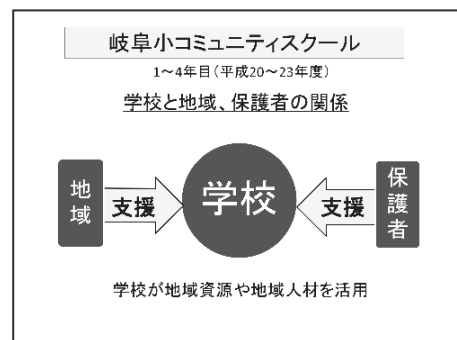


図 27 学校と地域、保護者の関係のイメージ (1~4年目)

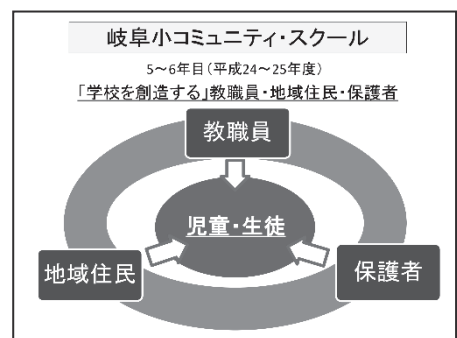


図 28 学校を創造する岐阜小コミュニティ・スクールのイメージ (5~6年目)

の仕事地域住民や保護者が分担するのではなく、それぞれの立場で子供たちにできることをプラスすることと理解され、地域住民や保護者は「学校を支援する立場」から教職員と協働して子供たちを育てる「学校を創造する立場」へと変わり始めた。

5-3. 地域を創造する学校へ

開校7年目の平成26年度には、学校運営協議会会長に元自治連合会長が就任する。「コミュニティ・スクールづくりは、まちづくりである」という考えのもと、地域の主体性がさらに高まり始めた。毎年行われる、新任自治会長を対象とした「岐阜小コミュニティ・スクール見学会」を開催するようになったのもこの時期である。また、岐阜小学校は同時期の平成26年度に、「みんな いっしょに」「もっと なかよし まちたんけん」「岐阜小校区のたから物をしょうかいしよう!」「ふるさとの環境を守ろう～金華山～」「校区の文化～ふれよう 学ぼう 語ろう」といった単元名の公開授業を行い、地域住民と子供たちが接する機会が更に多くなった。これらのことが相まって地域住民や保護者は、子供たちや学校を以前より身近に感じ、「地域の子供は地域で育てる」という意識を強く持つようになった。

「子供たちにしてあげているつもりでかかわってきたが、自分がいろいろなことを学ばせてもらった。」岐阜小コミュニティにかかわった多くの方が言われることである。子供たちのためにと集まった地域住民は、活動を進める中で、自分の新たな学びに気付く。例えば、コミュニティ・ティーチャーとして参加した地域住民の役割は、低学年では「教え、伝える」、中学年では「主体的な学びに助言をする」、高学年では「共に学ぶ」と変わってくる。共に学ぶことで学校が地域の生涯学習の場へとようになっていく。新型コロナウイルス感染症流行前には、学校が地域向けにロボットプログラミング講座を行い、PTAは成人教育講座を地域に開放した。また、従来子供向けのみであった前述の「サマースクール」も、令和4年度は大人の参加を促している。大人と大人も共に学び合う場がつくられてきている。

令和3年度末には、卒業を控えた6年生が、「地域の埋もれた文化財を発掘し、クラウドファンディングで集めた資金で観光資源化したい。」と地域向けにプレゼンを行った。5年生は、社会科の授業で地域の旅館を取材し、長良川周辺の歴史スポットを巡る観光プランを作成した。そのプランを長良川温泉組合に提案し、実際にガイドツアーが行われた。また、子供会では長良川の水害から地域を守ることを目的として、6年生の企画・運営で体育館での防災宿泊体験を行っている。

様々な場面での「ふるさと学習」を基盤としたこういった取り組みは、地域を刺激し、地域経済を活性化させる。生涯学習や地域の活性化など学校は地域を創造する力を持っている。コミュニティ・スクール制度の活用で、今後さらにその力が発揮されると考えられる。

6. おわりに

令和4年度の「サマースクール」に、ある地域の元PTA連合会長経験者の方が活動の参考にしたいと見学に来られた。15講座のうちの2講座を見終えたのち、「地元では1講座も同じようには出来ません。」と感想を言われた。理由は「子供も大人も楽しそうに活動している。特に大人が楽しんでいる。あの雰囲気は出せない。」であった。本来、人とのかかわりや学びは楽しいはずのものである。なぜか学校が関係する活動となると義務感や負担感が生じ、楽しくない活動と感じてしまう。コミュニティ・スクール活動は義務感や負担感を感じるような重い活動なのだろうか疑問がわく。岐阜小学校では、皆が主体的に楽しみながら活動している。コミュニティ・スク

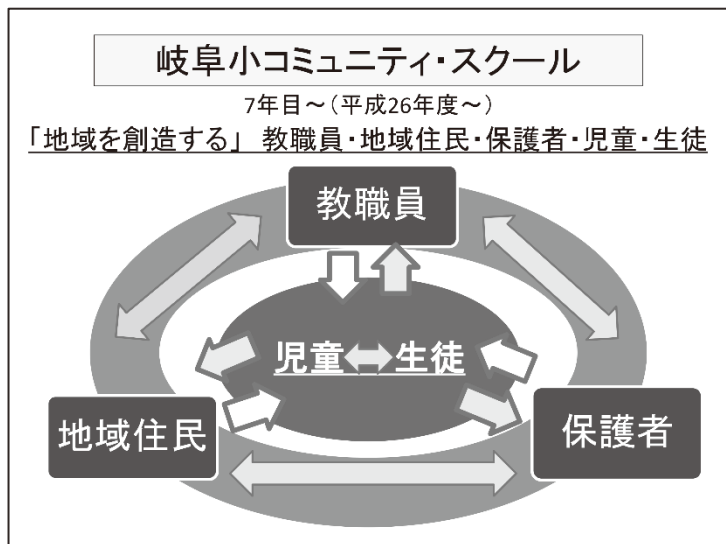


図 29 地域を創造する岐阜小コミュニティ・スクールのイメージ (7年目～)

ール先進校といわれるが当事者たちは全くピンとこないであろう。やりたいことをやっているだけなのである。ただ、そこには子供たちや地域の将来を思う熱い気持ちがある。もちろん初めからこのような状況であったわけではない。力を合わせ、前向きに様々な困難を乗り越えてきたからこそ今がある。岐阜小学校で育った子供たちが大人になり、当たり前のようにまた地域の子供たちにかかわるであろう。そしてこの地域が、コミュニティ・スクール制度を活用し、これから先もさらに絆を深め発展していくことが期待できる。

注)

- 1) 本稿は、岐阜小学校及び岐阜小学校コミュニティ・スクールに関する関係資料に基づいて執筆されている。